

演劇落語×月亭遊方落語アフタートーク

月亭 遊方

坂口 修一

矢内 文章

広瀬 依子

横田 修（進行）

※文中敬称略

横田 これより、ご出演者の月亭遊方さん、坂口修一さん、矢内文章さんと、上方文化笑学センターの広瀬依子センター長によるアフタートークを行います。

広瀬 お三方には、こちらも汗をかきそうなほど熱演していただき、ありがとうございました。落語を初めて聞く方も多かったようですが、落語がどのようなものなのか、またお芝居になるとこのようになるのだということがよく分かり、大変興味深く拝見しました。

横田 演劇にすることで、元来の落語に登場する人々がどのようなやり取りをしているのか、非常に分かりやすく観ることができたと思います。演劇落語はお二人でされていますが、通常の落語は、どなたも、お1人でされているのですよね。

遊方 はい。1人でやるほうが、2人でやるよりも、楽にできると思います。

横田 そういものでしょうか？

遊方 はい。

坂口 いいえ、そんなことはないと思いますよ。

遊方 そうでしょうか。2人のときは役割分担もありますし、お芝居を立ったままするのも落語のセオリーと異なるので大変です。

横田 セオリー（決まりごと）がある分、楽なのかもしれませんね。

遊方 また、今日は初めて落語を見に来てくださった方が半分ほどいらっしゃったので、演目も非常に迷いました。ここに来たときは、演劇落語の前に、とにかくお客様に笑っていただこうと思っていたので、新作落語をやるつもりでした。新作落語のなかから、いくつか用意して、できるだけ笑いが多く起こるように、そして拍手をいただくという気持ちで来たのです。しかし実際には落語の基礎的な部分、本当の前座ではないのですが、前座話を少し長めにして、落ちを自分で付けたものを聞いていただきました。やはり、初めに基礎について分かっていたから、様々な落語を見ていただいたほうがいいのではないかと思ったからです。

横田 舞台に上がられて、そこで演目を決められたのでしょうか。

遊方 はい。演目は2つ持って出ました。新作落語ではなく古典落語にしたのは、初めての方が多く、現代の話のあとに古典の『抜け雀』をすると、古典の芝居と分離してしまうのではないかと考えたからです。このイベントの世界観を壊さないように、早くから古典にしようと決めていました。また、登場人物が多い話を選びました。よく、落語家は複数の人物を演じ分けていると言われますが、落語家は演じ分けていません。声色も変えていません。お客様が頭の中で登場人物に分けて聞いているのです。俳優、役者とは異なる

- り、演じてはいけないというのが落語のセオリーで、お客様に演じさせるように持っていくようにしているのです。このような基礎の部分について、初めての方に聞いていただこうと思いました。
- 横田 受け取る側が自由に想像し、そのような人物をイメージしているということですね。
- 遊方 はい。酔っ払いをリアルに演じると、ろれつが回らず、何を話しているのか伝わりません。ですから、役者も最初に酔っ払いの真似をして、お客様がその人物を酔っ払いだと認識すると、そのあとも酔っ払いに変換されるのです。それは方言でも同じで、最初に土佐弁を話せば、そのあとは大阪弁を話しても、お客様は土佐弁だと認識するのです。このように、お客様にすべて委ねるのが落語の姿勢です。演劇は、見ていただいた通り、演じられるので、その違いも楽しんでいただければと思いました。
- 広瀬 役者は、相手の台詞を聞いて反応して演技をしますが、落語家がお芝居やドラマに出ると、その相手の台詞を待つのがつらいと聞いたことがあります。そのように感じるものなのでしょうか？
- 遊方 噺家が役者で出るときは、皆そう言います。自分が話していないときでも、役者は話さずに演技をしなくてはいけないので、それが苦手だという人は、噺家に多いようです。
- 坂口 そこは役者とは全く違うと思います。
- 遊方 はい、違いますね。
- 坂口 俳優は、むしろ聞いているときのほうがお芝居をしているというのでしょうか。自分の台詞を喋ってる時より、相手の台詞を聞いているときのほうが、しっかり芝居をしなくてはならないように感じます。
- 横田 話は少々変わりますが、俳優にとって、舞台の仕事とテレビドラマの仕事は同じなのでしょうか。
- 矢内 違いはあまり感じません。
- 坂口 おそらく、演技としては同じだと思います。ただ、舞台では止められることがなく基本的に長回しです。ワンシーンを通しての集中力や、すべて通して演技をする必要があります。テレビドラマではカット割りが入りますし、同じ台詞をカメラの向きを変えて3回も4回も撮影することがあります。そのようなとき、聞いている側の人物は全く映らないこともあり、この時、俺良い演技してたのに！…映っていないという残念なこともあります。
- 広瀬 お芝居の台詞に反応して、いい演技をしていたのにとということでしょうか？
- 坂口 そうです。聞いている相手の反応で芝居が変わるので、カメラには映らなくても相手役は立ってることが多いですね。
- 横田 落語はどちらかというと、1人でドラマをやっているような感じでしょうか。話している場面の、見えている部分を、すべて1人でやるということですよ。
- 遊方 そうですね。ただし、5、6人の登場人物すべてを演技するのは、絶対にはいけません。まず1人、2人するといえますか、やはり演じないということです。自分という核がなく、すべて演技をしてしまうと、落語にならないですし、落語の間にならなくなります。
- 広瀬 文楽の太夫さんも、なりきる一歩手前で止めるのだとおっしゃっていました。
- 遊方 同じですね。
- 広瀬 文楽も1人で登場人物を語り分けていますし、1人で語る芸と、相手がいて演じるのは違うのだと、今、発見しました。
- 遊方 そうですね。演じず、お客様に渡して、お客様に想像させることが大切です。とにかく作品の描写をお客様に渡して、お客様の前でやり取りさせるように持っていく。そういう段取りをします。初めて見に来られた方は、どうしても観察モードになっているものです。芝居も音楽も、舞台に立つものは空間芸ですので、客席の空気が堅いと感じたとき、その空間を壊すために盛り上げようとやり過ぎると、反対につまらない空気につながってしまいます。従って、楽しい空気が混ざるように考えますし、今回も混ざってくれたときに演

劇落語に渡せたと思います。

横田 すりこぎが、よかったです。(注：登場人物がすりこぎの位置を仲間に教えるが、なかなか通じないという場面)

遊方 すりこぎは、もう少し引っ張ることもありますが、そこで話した下ネタは余計でした。寄席の空気で行いましたが、要らないことを言ってしまったなと思いました。

横田 今回は、思っていた時間より長くなったのでしょうか？

遊方 本当にライブなので、空気によって、われわれも遊びながら進めることもあります。

横田 演劇落語のお二人に伺います。演劇におけるアドリブとはどのようなもののでしょうか？

矢内 演劇には、アドリブというか、即興性がふんだんに入っています。俳優は台本通り演じているとはいえ、いわゆる離見の見について非常に努力をしていますので、相手の話すことを聞くことで、その状況のなかで生きていけると言えます。それに加えて、自分自身を客観的に見ること、感じられることが必要です。俳優はふざけているようで、意外と忙しく、考えながらやっているのだと思います。特に演劇落語を2人でやっていると、即興は一番面白く、大切なところだと感じるのと同時に、やはり助け合いが重要だと思います。

横田 そうですね。先ほど、相手のために台詞を言う、というお話もありましたが、言われた相手も、段取りなく言われると大変でしょうし、助け合いが重要ですね。

坂口 そうですね。今日、一番危なかったのは、矢内さんに突然“ちくわ”と“はんぺん”を言われたときです。正直、話しているときに余計なことを言わないでほしいと思ってしまいました。ちくわとはんぺんを受けて、咄嗟に「練り物」という言葉が出たので本当によかったです。出なかったら、しばらく地獄の時間がやってきてしまいます。

横田 それでは、お客さまから出演されたお三方への質問をいただきたいと思います。いかがでしょうか？

観客 A 私は漫才がとても好きです。M-1なども今大きな話題になっていますが、人を笑わせることは、とても難しいと思っています。落語の視点と演技の視点で、笑わせる工夫や努力に違いがあるのかについて興味があるため、人を笑わせるために意識していることがあれば教えてください。

坂口 1人で落語をするほうがやりやすいと遊方さんはおっしゃっていましたが、演劇の場合、どこで、誰のところでお客さんに笑ってもらおうのかを考え、受け渡しをするものだと思います。台本に書かれている、笑ってほしいところで笑いが起こらず、1つ手前で笑いが起きると残念に感じることもあります。ですから事前に、この進め方では手前で笑いが起きてしまうかもしれないので、もう1つパスがあるといいのではないかなどと話して練習しています。演劇の場合は、パスをつないでいくことを意識しています。

矢内 遊方さんがおっしゃっていた、お客様の空気なり呼吸をできるだけ感じるように努力したいと思っています。無理に押していくと上滑りになるので、柔らかくいけるように意識しています。それでも、坂口さんを台から落とそうとした場面で、お客様が笑ってくださったので、そこは貪欲に2回目も行きました。

坂口 2回目は本当に危なかったです。矢内さんが僕を頭から落としかかってきたので、このまま落ちたら怪我をする！と踏ん張りました。

矢内 やはり、そういうように柔らかくいかないといけないと、心掛けています。

坂口 あ、ちなみに、この台から落ちそうになる場面はアドリブではなく、きちんと打ち合わせしています。この後も、二人でもめたりしませんので(笑)ご安心ください。

遊方 漫才の感覚は、新作落語だと思います。面白いことを串で刺すという感覚でしょうか。ですから、NGKなどに出演する文珍師匠やわれわれは、展開はなく、2人の人物が話しているように進めていきます。漫才の

ように2人の人間が立っているのではなく、1人で話しているので、それ以上展開すると、お客様はついていけなくなります。私もお笑いは好きですし、M-1の、さらば青春の光やニューヨークのコントや、ほかに、今風の例え話などを新作落語に詰め込むこともあります。しかし、こちらは、あくまで古典落語です。寄席のなかに新作があると喜ばれますが、落語を好きになってくださる方、特に若い女性は、古典から好きになる方が多いです。ですが、古典落語の笑いは、テレビにない笑いです。そして、新作落語の笑いは、テレビでただで見られる漫才などの笑いの延長なので、どうしても1人でやると不利になります。漫才はインタレスティングですが、落語の笑いはファニーなのです。奥行きや深みが見えてくると、古典落語の笑いにはまっていくと思います。関西で面白いと言えば、ダウNTOWNさんや、テレビ番組『人志松本のすべらない話』など、様々浮かびます。古典落語はそれとは全く違いますが、話の幅が見えると、はまっていただける方が出てきます。そして今、小さな落語ブームといえますか、落語を聞く落女、落語女子が出てきました。私は漫才も好きですし、新作をやるときにはそれも詰め込みますし、漫才、コント、どちらも、古典も新作でやりますが、基本はそういうことを考えています。

観客 A ありがとうございます。

観客 B 私は、あまりお笑いが好きではありません。落語は、今日初めて生で拝見しました。落語について、ほとんど知らないのて、1人で話されるのを聞いて本当に笑えるのかと思いながら見ましたが、大笑いさせていただきました。落語も面白いなと思いました。質問は、演劇落語についてです。落語を知らないのて、あらずじだけを見て、最初はお二人の配役が反対の役だと想像していました。この配役にされたのは、どういった意図があったのか、教えていただきたいと思います。

坂口 まずは、反対だと想像していたのはなぜか、お聞きしたいです。最初に登場してきた人物の身なりがみすばらしい感じが、反対のほうがよかったのでしょうか。

矢内 確かに、そうかもしれません。

遊方 無精ひげがありますからね。

矢内 それは一理あります。

遊方 本当に、そうかもしれませんね。

矢内 想像力に頼りきっている公演なので、やはり見た目は強いですね。

坂口 今回、台本と演出は矢内さんが担当してくれました。配役も矢内さんが決定したので、僕が異議申し立てをするわけにはいきませんでした（笑）。ただ今回は、1本で上演させてもらいましたが、通常の演劇落語を上演するときは、もう少し短い30分ほどの作品と、今回の少し長めの作品の2本立てで上演しています。ですから、1本目の配役とのバランスも考えられているのではないかと、勝手に思っていました。

矢内 そうですね。そういうことも考えますが、こちらの50分～60分かかる作品は、古典落語をそのまま書き下ろしたものではなく、私なりのアレンジを加えたものです。よくできている古典落語はすでに十分練られて素晴らしいのですが、それを2人の肉体でやるとなると、発話していない側がどうなっているのかなど、ストーリーを進めるためではなく、2人が生きている瞬間の積み重ねとしての台本が必要になります。そういう意味では「下げ」などは変わっていかなければいけない部分もあります。そうなったときに台本としては、1人の人物をしっかり主役にして芯を作ることが重要だと考えています。そこで、そういった役割をまず坂口さんに担当してもらおうと思いました。今回、私は演出も担当しました。稽古中も忙しく、そこまで頭が回らないこともあり、どちらかというと、にぎやかしのほうでいったほうがいいかなと思い、この配役にしました。

遊方 反対だった場合、ヒゲだらけのスズメになりましたね。

坂口 それで全然いいですよ！かわいいと思いますよ。ヒゲだらけのスズメより、ヒゲだらけの女将のほうが問題

- だったでしょう。
- 横田 今回、坂口さんは一役ですね。
- 坂口 そうです。
- 横田 坂口さんは一役で、矢内さんがスズメから何から何役も演じられていました。もし、今回の演劇落語の演目を落語家がやるとすると、落語家が5匹のスズメもすべてされるのですよね？
- 遊方 そうですね。チューンまではこなせませんが、チュンチュンとは鳴きます。スズメの気持ちになってチュンと鳴きます。
- 矢内 落語の「下げ」では、父親をかごかきにしまったというところで終わります。しかし今回の演劇落語では2人いますので、落語と同じ「下げ」で終わると2人の肉体が終われないように感じました。そこで今回は、主役が最後に何か言うように変えさせていただきました。そこで思い付いたのが、止まり木です。
- 遊方 演劇落語と落語の落ちに違いがあるのは、わざと変えているのではなく、芝居は芝居なりの落とし前の付け方があるということだと思います。
- 横田 この「下げ」に関しては、落語をよく見られている方がどのように思われるのか興味がありますね。
- 矢内 そうですね。
- 横田 それでは、最後の質問にさせていただきます。
- 観客 C 今日のリハーサルは、どのくらいの時間されたのでしょうか。そして、プロの方は、普段、落語、演劇落語ともに、どのように練習されているのでしょうか。
- 坂口 今朝こちらの会場に入り、設えを作っていただいて、そのあと少し音響や照明と合わせて、午後3時ごろから一度頭から通して公演に備えました。初めて演劇落語の作品を作るときは、約2週間かかります。
- 矢内 今回は2人だけなので、台本をお渡しして、その台詞自体は、ある程度まず自分で覚えます。そのあと、2人で合わせる時間を2週間ほど取ります。理想としては、1週間合わせて、間に何週間か置いて、もう1週間という熟成期間があると素敵ですね。そういうことを考えながら作っています。
- 横田 どちらにせよ、実際の稽古は2週間程度ということでしょうか？
- 矢内 そうですね。そういう意味では、台本をどのように覚えて、どのぐらい即興的なものを混ぜていけるかになります。
- 坂口 今の説明は、最初の立ち上げのときの話です。今回の作品は初演を終えており、再演ですので、昨日東京から来て、合わせの稽古をして、本日本番という流れでした。
- 矢内 費用対効果を上げていかなくてはいいからですね。
- 坂口 やらしい、やらしい（笑）。
- 横田 落語家さんのレパトリーのようなものでしょうか。
- 矢内 そうですね。そうしていかないといけないと思います。
- 坂口 僕らは普段の舞台だと、1カ月から1カ月半ほど、みっちり稽古しますが、落語家さんはどのくらい稽古されるのでしょうか？
- 横田 私も気になります。
- 遊方 人によると思います。稽古の仕方も、歩きながらの人もいますし、私はお風呂に入りながら稽古します。やはり先輩や師匠に稽古を付けてもらうほうがお腹に入りますし、バックボーンや知識も教えてもらえるので、誰かに稽古を付けてもらう人もいますし、練習の仕方はそれぞれ違うと思います。本当に稽古嫌いな人もいますし、稽古の好きな人もいます。そして、そのことと面白さは重複しないものです。
- 横田 遊方師匠はどちらですか？
- 遊方 私は直前のタイプです。当初は5つほどの新作を考えていましたが、今日の『寄合酒』という話は想定外で

したので、お弁当を食べるときにイヤホンで聞いて、あわてて仕上げました。『寄合酒』と、もう1つ候補があったのですが、それをここで決めようと思っていました。

横田 受付準備の際、イヤホンで聞きながらお弁当を食べられていましたね。

遊方 そうです。『寄合酒』は練習してこなかったの、イヤホンで聞いていました。もう1つの作品は何とか入っていたのですが、どちらをやるかは、ここでアンケートを採って決めようと思っていました。

観客 C ありがとうございます。

横田 本日は貴重なお話をいただきまして、ありがとうございました。ご質問は尽きませんが、残念ながら時間いっぱいでございます。当センターでは今後もこのような催しを企画しておりますので、またご来場いただけますと嬉しい限りです。皆さま、本日はありがとうございました。